

氏 名 秋山 笑子

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1779 号

学位授与の日付 平成27年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 「都市近郊低湿地における生業の研究—近現代の河川沿い
集落にみる生活戦略—」

論文審査委員 主 査 教授 小池 淳一
教授 松尾 恒一
教授 横山 百合子
教授 川島 秀一 東北大学
教授 安室 知 神奈川大学大学院
准教授 和田 健 千葉大学

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本論文は民俗研究の立場から、都市近郊低湿地の生活を民俗誌的な手法により描き、そこにおける生業と生活戦略を検討しようとするものである。具体的には、近現代における河川沿いの二つの地域の低湿地における生活と環境の変化との関連について考察するものである。

序章では、本論文で用いる基本的な方法を、低湿地における生業研究の蓄積を具体的に検討することで導き出そうとした。その中で、まず柳田国男が指摘した都市と農村の連続性を生業の問題から注視する観点と、渋沢敬三とアチックミュージアムに関わった人々が持った「農漁民」という概念に注目した。そして、これらの視点が環境民俗学の成立や複合生業論の提唱へと継承されていったことを指摘した。中でも安室知の複合生業論は、生業を複合的に組み合わせて生計を維持するシステムを抽出する視点を有している。本研究はその視点を受けて、生業複合論でこれまであまり目配りがされてこなかった都市近郊の低湿地という地域を対象として分析を進めることとする。さらに、日記や手帳などの生業従事者自らが記した資料を用いて分析することにより、生活戦略のあり方をトータルに追究することとする。

第1部では、都市近郊低湿地のうち河川沿いの内水面である千葉県北東部に所在する手賀沼周辺で暮らす人々の生活のあり様を、生活戦略という視点により検討した。第1章「手賀沼の開発と生業」では、江戸時代から明治時代までの手賀沼の生業について考察し、人工的管理と自然の脅威、資源の減少と資源保護という二つの対抗軸から、生活戦略が編み出されたことを指摘した。第2章「手賀沼における外来生物の流入と自然環境の変化」では、大正から昭和初期の『増田実日記』を資料として、手賀沼の環境変化について検討した。自然資源の減少や外来生物の流入等を察知することにより、自然環境の変化に気づいていることが判明した。また、自然資源の価値が社会的な要望の中でめまぐるしく変化し続けることを見いだした。第3章「手賀沼の環境と生活変化」では、『増田実日記』から労働時間について分析した。増田のライフヒストリーを、青年期〈大正5年(1916)～大正8年(1919)〉、婿養子期〈大正9年(1920)～昭和3年(1928)〉、分家期〈昭和4年(1929)～昭和16年(1941)〉、老年期〈昭和33年(1958)～昭和34年(1959)〉の四つに区分し、時期毎の労働時間の変化を分析した。そして、環境が変化する中で、生活戦略として生業を変化させていく過程を考察した。結果として、生業複合の構造が変化する契機は、個人的な変化、環境的な変化、社会的な変化によることを明らかにした。第1部全体の考察を通して、手賀沼周辺の生業の変化には、江戸時代の新田開発以降の沼稼ぎと農業という生業形態の成立期、明治時代後期の自然資源の減少に伴った養殖技術の導入期、昭和20～40年代に起きた自然環境の悪化と社会構造の変化による転換期の3つの時期に分けられることが指摘できる。特に昭和初期の水害により、手賀沼周辺の生活は行商中心へと変化していく。その後の手賀沼の環境悪化や干拓事業等により、結果として沼から離れた生活になり、生業の多様性は失われていく。そして、労働構造の変化は家族のあり方や家についての意識をも変化させていったことを指摘した。

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

次に第 2 部では、都市近郊の海付きの低湿地における生業形態の変化と分業について、千葉県浦安市をフィールドとして検討を進めた。第 1 章「浦安の開発と生業」では、塩田の荒廃により漁業と稲作を行う生業へと変わり、その後明治末期から海苔養殖と貝養殖の技術を導入し、海苔養殖と貝養殖と行商という特徴的な生業を発展させた経緯を考察した。第 2 章「浦安における稲作とハス栽培の導入」では、自給的な作物であるイネから換金作物であるハスへと転換を図った生活戦略を検討し、労働構造の変化や交通網の整備が生業に与えた影響を明らかにした。第 3 章「西脇保男の手帳にみる浦安の生業の変化と生活戦略」では、西脇保男の手帳を素材に、時期毎の生業暦を整理し、生業毎の作業日数を検討することにより、労働時間の配分と生業の変化を分析した。作業の内容等については、西脇の妻の著書や筆者の聞き取り調査により補完した。これらにより、稲作やハス栽培、海苔養殖は基本となる生業であるのに対して、アサリ行商や短期賃金労働等を便宜的に組み合わせて組み立てていたことが判明した。第 2 部全体の考察を通して、生活を安定させるための生活戦略として、新たな生業や技術の導入に積極的なことが地域的な特色といえる。またもう一つの特色は、男女ともに複数の生業に関わる点である。それぞれが専門化せず、分業と細分化により、農地としては適していない低湿地の生業を安定させていったと指摘できる。

全体の結論としては次のことが明らかになった。まず、第 1 の特徴として内水面沿いと海付きの低湿地における生業は、多様であり、複合生業といえる生活形態が展開されてきたことが指摘できる。それらの変化には、個人的な変化、環境的な変化、社会的な変化の 3 つのレベルがあり、それらに対応して生活戦略が構築されてきた。こうした昭和初期までの生活戦略は、安室知が生業複合論の中で類型化した外部的複合にあてはまる。低湿地では、一つに特化するほど有力な生業技術が存在せず、その結果として生業複合度が高くなるといえる。第 2 の特徴としては、都市の近郊という条件を生かした生活戦略が組み立てられてきたことを指摘できる。都市近郊の低湿地であることにより、都市の影響を直接受け、生産から流通へと生業を転換し、伝統的生業の基盤が解体された。こうしたことは、異なる生業構造への転換とまとめることができる。以上のことから、都市近郊低湿地における生業が、自然資源を活用した生業の転換や技術の導入を取り入れる構造を有していたことが明らかになった。

博士論文の審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は手賀沼と浦安という東京近郊の低湿地における生業の様相を対象とし、そこにおける環境や社会の変化に地域の人びとがどのように対応して生活を維持・発展させてきたかについて、2部6章にわたって分析、検討を加え、都市近郊の低湿地という条件に対峙して複合的な生業活動が編み上げられていく過程を実証的に論じたものである。

序章では本論文の前提となる先行研究の整理と検討が行われている。ここでは「都鄙連続論」（柳田國男）、「農漁民」（渋沢敬三）といった視点の形成とそれを可能にした調査・研究の経緯をたどり、残された課題を探っている。なかでも生業論と環境論との接合を可能にした複合生業論を重視し、これを生業分析の理論的到達点と位置づける点がまず注目されよう。

第1部では内水面の手賀沼沿岸における生業を取り上げている。第1章「手賀沼の開発と生業」では近世から近代にかけての生業の変遷を通史的に概観し、自然環境に対応しながら生業を組み立ててきた状況と資源の減少によってそれらが再構築を余儀なくされていく様相について民俗誌的な記述が行われている。ここでは都市近郊の内水面という環境をいかす一方で、生活を営む上でさまざまな制約があったことをとらえており、いわば、マクロな視点で生業と環境との相関を論じている。

第2章「手賀沼における外来生物の流入と自然環境の変化」では大正から昭和にかけての自然環境の変化を増田実という個人の日記を素材として分析を加えている。特に外来生物であるウシガエルの流入とその利用が手賀沼の生業を大きく変化させたことを詳細に論じ、内水面の生活が、自然資源に対する社会的な評価によって変貌していく過程を記述している。近現代における生業の変化を、生活者の日記をもとに描き出すミクロな視点での叙述が一定の成功を収めている。

第3章「手賀沼の環境と生活変化」では増田実の労働時間を4つの時期に区分して分析を加え、手賀沼における生活戦略が個人のライフステージだけではなく、環境の変化、社会的な要因などによって、再編、更新されていくことを論じている。手賀沼における生業活動の変化を数値化し、その変動を客観的に把握することで、生活者の主体的な生業活動と、環境・社会への対応を丁寧に描いている。日記資料を用いて個人の生業を一定の環境のなかでの創造的な営みとしてとらえていく方法は高く評価できる。

第2部では海付きの低湿地である浦安における生業を取り上げている。第1章「浦安の開発と生業」ではこの地域における近世以降の開発と生業の変遷を、漁業・農業、そして養殖に加えて行商に着目して記述している。都市近郊という条件をいかしながら生業が変化していったことを指摘し、動態的に生業の様相をとらえ、この地域の生活の大枠を定位している。

第2章「浦安における稲作とハス栽培の導入」では農業に注目し、稲作やハスの栽培における環境の利用や生産の工夫を西脇保男という個人の手帳を分析することで論じている。特に生業の転換および交通網の発達との相関を具体的に描き、環境の変化が著しい地域における生活の変容を詳細に論じることに成功している。生業の変化を生活者の主体的な姿勢とからめてとらえる視点が重要である。

第3章「西脇保男の手帳にみる浦安の生業の変化と生活戦略」では西脇保男が記した手帳の生業に関するメモを妻の回想や関連する聞き書き資料とともに分析している。特に労働時間の推移について数値化して客観的にとらえ、分析を加えることで、農業・養殖と行

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

商・賃金労働を巧みに組み合わせて生活を構築してきたことを具体的に提示し、その構造を明らかにしている。性質の異なる資料を総合して、生業の構築の過程と転換とを精細に把握する方法は優れたものである。

終章においてはこれまでの議論を複合的な生業、とりわけ外部的な複合ととらえ、その度合いが高いこと、その際には都市近郊という条件に大きく影響されており、そうした環境と社会条件が生業の選択と転換にあたって大きな要因となってきたことが整理され、論じられている。低湿地における複合生業を広義の環境変化との関わりに留意して描くことで、従来の研究を一段高い段階へ進めたといえよう。

全体として本論文は豊富な民俗誌的なデータに加え、日記や手帳などの文字資料をも積極的に活用し、実証的で奥行き深い議論を展開している。とりわけ、都市近郊、低湿地という環境のなかでどのように生業が選択され、実際に生活を支えてきたのか、いわゆる複合生業論に新たな知見を加えている点は高く評価すべきである。聞き書きに基づく生業の輪郭を、日記・手帳といった文字資料を用いた定量的な分析で意味づけていく手法は周到であり、説得力に富んでいる。また各章の記述が他の章と相互補完的になっており、マクロな状況の把握とミクロな生業の選択とが組み合わせられて叙述が進められていく点も優れている。加えて第1部においては内水面漁業が一定の割合を保っていた大正期から、行商を柱とする生業への転換過程、およびそれがどのような家内部の分業によって可能になっていたのかを明らかにしている点は興味深い。また第2部においては、漁業の放棄から農業の選択、行商への参画といったダイナミックな変換が多角的に描き出されていることも重要で新たな生業記述の方法として注目される。

ただし、本論文にも若干の欠点がないわけではない。本論文は論者自身による詳細かつ膨大な聞き書き資料をその基盤としており、その周到な提示のために、冗漫な印象を与える部分がある。また、分析・考察を進めていく上での術語が十分に吟味・定義されていない場合があり、論述が平板になるきらいがある。さらに都市近郊の生業を考える際には観光や人の移動なども重要な条件になり得るはずであるが、その点関しての論述は弱い。

しかしながら、以上の欠点は将来の課題、特に理論面での検討に属するもので、本論文の論者自身が今後、意識し、乗り越えていくべきものである。本論文で示されたフィールドワークに基づく資料収集能力と論文の構成はこうした欠点を克服する可能性を十分に有していることを示している。本論文は民俗学において比較的等閑視されてきた都市近郊の低湿地における複合的な生業を正面から取り上げ、多くの知見をもたらした労作であり、審査委員は全員一致で本論文を総合研究大学院大学における学位を授与するのにふさわしいものと認定した。